



令和8（2026）年7月7日

校長だより Vol.6



「同じ星を見て歩いていきましょう！R8㊦」 ～「心で見つめる、本当に大切なもの」～

本校では「同じ星を見ながら・・・」という言葉大切にしています。

生徒、保護者、地域、そして私たち教職員が、清水西高のあるべき方向性を共有し、ともに一歩ずつ進んでいきたいという願いが込められた言葉です。この「星」という言葉に触れるたび、私はアントワヌ・ド・サン＝テグジュペリの名作『星の王子さま』に出てくる、ある有名な言葉を思い出します。

「ものごとはね、心で見なくてはよく見えないんだ。いちばん大切なことは、目には見えないんだよ。」

学校生活の中には、目に見える成果はたくさんあります。

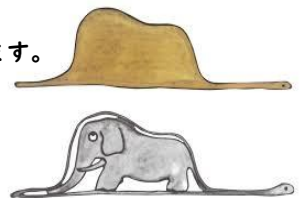
テストの点数、部活動の大会結果、資格の取得など、これらはどれも素晴らしい努力の成果であり、当然ですが、目に見えるからこそ分かりやすいし、明確な目標にもなります。



でも、その成果の裏側にある「本当に大切なもの」は、実は目に見えないところに隠れています。結果が出るまでに流した悔し涙や、諦めなかった粘り強さ。肩を落として落ち込む友人にそっと寄り添った優しさ、一つの物事に夢中になって取り組んだ純粋な情熱などなど。

これらは、通知表の数字や賞状の文字のように、直接的に表れはしない、目には見えないものです。

しかし、こうした『目にはみえにくいこと』にこそ、大切なメッセージや教訓が含まれています。案外、努力したのに報われなかった経験の方が、その後の人生を支える財産になったりします。



王子さまは、自分の星に残してきた一輪のバラについて、こうも語っています。

「僕のバラが、あんなに大切に思えるのは、そのバラのために、時間を無駄にした（費やした）からなんだ」

生徒がこの清水西高で過ごす何気ない毎日、仲間と語り合う時間、悩んだり迷ったりする時間。それらのすべては一見「遠回り」のように思えても、本人も、そして大切な仲間を輝かせるために必要不可欠な、掛け替えのない時間であるはず。私たち教職員はできるだけ、そうした瞬間に寄り添いたいものです。もっといえば、そうした「心」が成長する場面を、私たちが意図的に仕掛けていくのです。目に見える数字や結果だけにとらわれることなく、多くの生徒が日々積み重ねている「目に見えない努力や心の成長」を、私たち自身も「心」で見つめ、しっかり支えて、励まし鍛えながら成長させるのです。

私は、そうしたやり取りがたくさん出来る清水西高校が大好きです。手を掛ければ掛けたとおりに、心を掛ければ掛けたとおりに、生徒は必ず成長していきます。“伸びしろ”が大きい学校なのです。だからこそ、学校、家庭、地域が手を取り合い、西高のすべての生徒が逞しい変容を遂げられるように、

「同じ星」を見上げながら、これからも一歩ずつ、温かく、そして根気強く歩いていきましょう。

Le Petit Prince



同じ星を見て歩いて行きましょう！R8⑧ ～私たちが受け取ってきたもの、そして、未来へ繋ぐもの～

先生方に、ふと振り返ってみたいことがあります。それは、私たち自身が「高校生」だったあの頃のことです。当時の私たちは、未熟で、時に迷い、時に壁にぶつかりながら生きていました。そんな私たちを支えてくれたのは、厳しくも温かく導いてくれた「恩師」であり、見守り続けてくれた「親」であり、苦楽を共にした「仲間」でした。私たちはあの時代、言葉では言い尽くせないほどの多くの温かい想いや、無形の財産を彼らから享受してきたはずです。今の私たちの歩みは、その時に注がれた愛情や教えの上に成り立っています。だからこそ、私たちは今、2つの形でそれを還元していく役割を担っているのではないのでしょうか。



「ペイバック pay it back (恩返し)」としての実践

一つは、自分を育ててくれた恩師や親、かつての仲間たちへの「pay it back (恩返し)」です。直接本人たちに何かを返すことだけが恩返しではありません。たくさんの方が私たちに注いでくれた情熱や愛情を、今度は自分が『人づくり』が出来る先生として、誇りを持って社会に還元していくこと。それこそが、最高の恩返し（ペイバック pay it back）になると思います。



「ペイフォワード pay it forward (恩送り)」という未来へのバトンを繋ぐ

そしてもう一つ、さらに大切なのが「ペイフォワード pay it forward (恩送り)」です。私たちが高校時代に受け取った素晴らしいものを、当時の大人たちに返すことは難しくても、今、目の前にいる「清水西高の生徒たち」という次の世代へ、未来へと繋いでいく（送り届けていく）ことです。私たちが実践している「人づくり」とは、まさにこの ペイフォワード pay it forward そのものです。先生方が今、生徒たちに注いでいる情熱や温かい眼差しは、巡り巡って、彼らが大人になったときに次の世代へとまた受け継がれていきます。

私たちは清水西高で、「同じ星を見ながら歩こう」という共通の方向性を目指しています。私たちがかつて享受した素晴らしい想いを胸に、未来の「人づくり」を、これまでの自らの歩みを通じて、目の前の西高の生徒に、そして、しっかりと次の世代へ還元していきましょう。



喜神 ～運命を開く力～

(安岡 正篤氏の名言集『天籟(てんらい)の妙音』から)

いかなることがあろうとも、心の奥深いところにいつも喜びを持って対処すると、困難も逆境もいつしか越えられていく。人には運命といわれるものが確かにあるが、それは避けられない運命ではない。いかなることがあろうとも、甘んじて受け止め、喜神（喜びの気持ち）を含んでコツコツと努力すれば運命は必ず開かれ好転していく。

富士宮市の副市長に篠原晃信さんという方がいます。(前任校時代の話です。)この『喜神』にはエピソードがありまして、篠原さんと、当時富士宮市の番記者だった若手記者の話です。篠原さんは、在任中に地域連携等のことで御挨拶に伺ったところ、年齢が同じということで、各々の高校時代の話で盛り上がり一気に仲良くなった方です。当時篠原さんは経営戦略室長だったのですが、翌年に副市長に昇任されました。立場が変わってもお人柄はそのままで、どんな時も母校のことを気にかけてくれ、私との交流も好意的に続けていただいていた。そんな篠原さんが、9月に交通事故に遭われました。頭を強打し手術をしたとのことで、大変心配でしたが、術後の経過も順調で、年明けの一月から職務に復帰されました。怪我の場所が場所だけに、お見舞いにも行けず悶々としていた年末に、なんと篠原さんの方から「家も近いし、リハビリのついでです。」と、校長室を訪ねてくださいました。お見舞いに行けたらと用意していたコーヒーや、リハビリついでに読んでくださいと半ば押し売りの『校長だより』を渡したら、数日後に、『山野さん、感動した。』と手紙と共に贈られた(頂戴した)のが、この『天籟の妙音』です。篠原さんの事故は報道もされましたので、当時の記者が見つけて、コラム『清流』で、篠原さんとのエピソードを綴っていました。年齢でいえば二回り以上年下のその記者は、ともすると閉塞的になりがちなコロナ禍の最中で、現状を打開しようと奔走する篠原さんと意見が合わず、衝突することもあったそうですが、全力で真っ直ぐな仕事に向き合う姿勢からたくさんのことを学んだ、と記してありました。そして、あの時に篠原さんから励ましてもらった、この『喜神』のことばの意味を今こそ借りて、自分が篠原さんにエールを贈りたい、とありました。仕事や立場を越えて、人に真剣に向き合うこと。その人を大事にして託すこと。

『pay it back』そして、『pay it forward』 私たちの仕事を通して伝えていかねばならない、そう強く思いました。